

近江は琵琶湖を中心に湖東、湖北、湖西、湖南と大きく4つのエリアで呼ばれることがあります。2018年度は『街道をゆく』の1巻「湖西のみち」と16巻「観山の諸道」をもとに、湖西エリアの文化を発見し発信しました。2019年度は『街道をゆく』の24巻「近江散歩」から湖東・湖北エリアの魅力を発信します。

本冊子は、滋賀県の近江文化発見・発信事業の一環として、司馬遼太郎さんの文献をもとに、学生が見つけた近江(滋賀県)の魅力を発見し発信するものです。



天

P4

地

天

P5

地



「近江から始めましょう」の一言からはじまった『街道をゆく』シリーズで、何度も近江に足を運んだ司馬さんが「もう一度、近江に行きましょう」とはじまる『近江散歩』。その中から近江の魅力に迫るのは、滋賀県唯一の芸術大学である私たち成安造形大学の学生です。『街道をゆく』に登場する土地をフィールドワークし、学生の目線で近江の魅力を見つけました。近江の魅力をお弁当のように詰め込んで、1人でも多くの人に届けたい！そんな思いで冊子『近江路』を作りました。ぜひご堪能ください。



近江路をめしあがれ！ …… 08

司馬さんと近江のつながり

特集

いただきます！ …… 10

人の暮らしと自然の共生 …… 12

ホンモロコ为天ぶら

風土が生み出した文化 …… 16

赤こんにやくのきんびら

近江商人が残した意思 …… 20

丁字麩ちやうじこの辛子酢和え

ごちそうさま！ …… 24

近江路ができるまで

アイデアを求めて …… 26

ワークショップをしました

食材探し …… 28

フィールドワークをしました

撮れたて近江文化 …… 30

SNSで発信中！

私たちがつくりました …… 32

プロジェクトを終えて

あとがき …… 34

近江路を召しあがれ！

司馬さんと近江のつながり

P8



P9



特集

いただきます!

「近江路」は近江の魅力がギュッと詰まったお弁当です。

司馬さんは『街道をゆく』の中で、
「私はどうにも近江が好きである」と書いています。
近江には、長い歴史と交わる多くの街道から育まれた
文化の魅力があふれています。

司馬さんを魅了した近江から、
成安造形大学の学生たちが厳選した3つの魅力を詰め込みました。
近江米のおにぎりと一緒に召し上がれ。





ホンモロコの天ぷら

ホンモロコは琵琶湖の固有種であり、骨が柔らかく、冬から春にかけて脂がのり、素焼きや南蛮漬けなどで近江の人に親しまれています。

『近江路』では素材そのままの味をいかしてサッと揚げた天ぷらでお召し上がりください。

ホンモロコの他にも、鯛寿司の材料の鯛や、佃煮に使われる小鯛など、近江の人たちは琵琶湖の恩恵を受けてきました。

『街道をゆく』で司馬さんは「この国をゆたかにしてきたのは、琵琶湖である」と述べています。

近江の人たちの暮らしは琵琶湖と密接に関わってきました。

近江を豊かにした琵琶湖と人の関係から生まれた文化に迫ります。

近江では、昔から琵琶湖や川の水を使って生活してきました。しかし、昭和55年頃、淡水赤潮が大発生しました。原因はリンが含まれた合成洗剤などの使用による富栄養化です。富栄養化前のきれいな水に戻そうと近江の人たちはリンが含まれた合成洗剤の使用をやめ、粉石けんを使おうという石けん運動など、生活を見直すことになりました。自分たちの暮らしのためだけでなく、京都・大阪の人たちの暮らし、住んでる生き物のためにも水をきれいにしようと努めたのです。

湖を思いやる暮らし

近江八幡市にある西の湖周辺の小中之湖地区は、よしきりの池と呼ばれる水質保全池を作りました。小中之湖地区の生活排水は、よしきりの池をおとることできれいになり、湖や川に流れていきます。よしきりの池は、ヨシや微生物の習性を利用して、水をきれいをしています。琵琶湖や内湖にもたくさん生えるヨシは、富栄養化の要因となる、水中の「窒素」や「リン」を養分として吸収する性質があり、水の浄化に関わっています。

司馬さんは「街道をゆく」の作中で、西の湖の船頭さんとの会話から「よし・あしにつよい浄化能力があることは書物によって知っていたが、福永さんたちは体験として知っている」と述べています。ヨシの特性を知っている近江の人たちは、水中の汚濁物質を取り除き水質をたもつため、毎年ヨシ刈りを行なっています。また、貴重なヨシを育てるため、ヨシ刈りを行うだけでなく、刈り取り後、ヨシ池に火をつけて焼きます。焼くことで雑草や病気のもとを除去し、ヨシが春になるとよく育つようになっています。刈り取られたヨシは藁糞や茅葺の屋根に使われていました。ヨシ紙に加工したり、お祭りに使っていたり、ヨシの根を薬にしたり、さまざまなところでみられます。近江ではヨシを守る、育てる、活用する、のサイクルを大切にしています。



西の湖のヨシ

人と魚の共生

長浜市に姉川が流れています。姉川では3月から8月までやな漁が行われています。琵琶湖から姉川に遡上してくる魚を流れの弱いところに誘導して、「あんどん」と呼ばれる網のついた装置で魚をつかまえます。姉川で魚をとる時期は3月から8月であり、期間中でも20日に1回は魚を上流に逃がす日を設けて魚を残す工夫をしています。近江の魚は地にもえり魚やもんどり魚などがありますが、どれも魚の習性を活かした待ちの漁法です。魚に合った仕掛けをつくり魚がかかるまで待ちます。地域によって農業の合間などにも魚をとる習慣があったので、待ちの漁法がより発達しました。滋賀県を流れる

の河川のうち、117本の河川が琵琶湖に直接流れ込んでいますが、流れ出ていく河川は瀬田川一本しかありません。瀬田川から入ってくる魚も出ていく魚も少ないため、琵琶湖や内湖、川には固有種が多く住み続けています。固有種をたくさんとり続けると、将来産まれる数が減り絶滅の恐れにつながります。近江の人は、魚を独自ので行ったり、禁漁期間や大きさの制限を作ることで固有種を守っています。琵琶湖の魚は海のないう近江の人たちの暮らしを支えてきました。特に鮎ずしや佃煮は、貴重なたんぱく源を長期保存できるように発展した湖魚料理です。



五箇世の川戸



近江では、水に近い暮らしをしているからこそ、独自の魚や食文化が発達してきました。司馬さんは「この国をゆたかにしてきたのは、琵琶湖である」と述べています。自然のサイクルと人の暮らしは密接に関わっていて、琵琶湖や内湖は生活の中心となっていました。現在、滋賀県では、琵琶湖をマザーレイクと呼び、暮らしの知恵を受け継ぎながら、この豊かな琵琶湖を守っています。





風土が 生み出した文化

中谷陸 比嘉奏太



赤こんにやくのきんぴら

近江八幡名産の赤こんにやくに、近江牛と野菜を加え、ごま油でザッと炒め、甘辛く味付けしました。

赤こんにやくが赤いのは、酒好きで雄飛田信長が左義長祭りという伝統行事である火祭りで、

赤い長襦袢を着て踊ったということにあやかって作られたという説があります。

赤い色が独特な赤こんにやくのように、近江には、他にはない近江ならではの風土があります。

近江の風土について司馬さんは『節道をゆく』のなかで「近江には、多くの例証から、独創者を出す風土があったといえる」と述べています。

「独創者を出す風土」が生み出した近江の文化に迫ります。

1 技術を育んだ風土

長浜市に「**国友町**」という集落があります。そこには1543年のポルトガルからの鉄砲伝来以後、幕府からの発注を受けて鉄砲作りに関心した職人たちがいました。鉄砲づくりに欠かせないネジの仕組みも解明されていないなか、『街道をゆく』には、ネジを開発した若者の名と功を褒めたええエピソードが描かれており、「**独創者をおさえつけずに、逆にほめそやす気分が、風土としてあったのであろう**」と述べられています。その風土が、わずか1年後に2挺を完成させ、その6年後には500挺を織田信長に発注させるまでに至ります。国友鉄砲の技術に目を付けた信長は、**長篠の戦い**を制し、天下統一まであと一歩というところまで迫りました。『街道をゆく』のなかに「**鉄砲の出現と普及が、戦国の群雄割拠の状況から、歴史を統一にむかわせた**」とあるように、国友鉄砲が、戦国時代を終わらせるのに、大きな役割を果たしました。



国友鉄砲の里資料館にて

江戸時代に入り、鉄砲が使用される機会が減ってくると、国友鍛冶職人の在り方も変わってきました。銃身や、鉄砲そのものには金工彫刻が施されるようになり、「**美術品としての価値**」が目されるようになりました。江戸末期で培われた火薬の知識や技術は、**花火の制作**にいかされるようになりました。また、**国友一貫斎**（九代目**国友源兵衛**）は、グレゴリー式望遠鏡を国内ではじめて作製するなど、鉄砲職人だけではなく発明家としても有名で、自作の望遠鏡で太陽の黒点の観測や、月や土星の充実なスケッチなどを残しており、**日本の天文学者の先駆け**としても知られています。鉄砲を生産しなくなった現在でも、金工彫刻は長浜の宝山にいかされ、花火は、日本各地の花火大会にいかされるなど、近江の「**独創者を出す風土**」が生み出した技術は数々と受け継がれています。



一貫斎が発明した反射望遠鏡



鉄砲に施された金工彫刻

花火大会は、慰霊や疫病退散を願い、始められたという説があります。そして、鉄砲も戦いの道具ではありますが、国友鍛冶職人の「**戦争を終わらせたい**」という思いが込められていたのではないのでしょうか。

（取材協力：国友鉄砲の里資料館）



2 織田信長が愛した近江の地

「**織田信長という人は、湖と野の境にある山上にいたのである**」と司馬さんが表現した安土城は、現在の近江八幡市安土町にありました。安土城が安土に建てられた理由として、「**交通の要衝であったから**」という説が有力です。当時の街道や琵琶湖との位置関係から、安土は陸路、湖路ともに充実していました。しかし、それだけではなく「**近江の高い技術力を、信長が気に入ったから**」という理由もあるのではないのでしょうか。



国友鍛冶職人の地にも、**穴太衆**という、高い石積み技術を持つ職人たちがいました。渡来人がルーツと言われる穴太衆は、古くから寺社仏閣や城郭の石垣づくりに携わってきました。穴太衆については、司馬さんの『街道をゆく』でも触れられており「**この技術の伝統を背負った近江の穴太衆への敬意をわすれるべきではない**。」と書いています。穴太衆はのちに信長に認められ、安土城の石垣作りに参加するようになります。司馬さんが「**新奇を好む若殿**」と表現した信長は、南無宗座やキリスト教など、**良いと思ったものを積極的に取り入れました**。信長にとって、国友鍛冶職人や穴太衆といった職人や渡来人の技術を持つ近江の人々は、魅力的に映ったのではないのでしょうか。



安土城跡の石垣



新しい技術を盛り入れていった信長

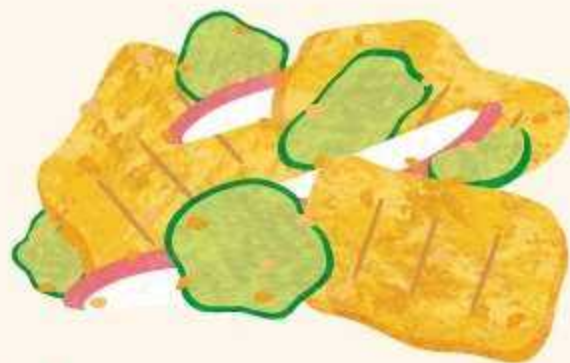
近江には、古くから渡来人や、他国の文化が多く流れ込み、技術を発展させてきました。近江の外から伝わってきた文化をより発展させて、今日までも受け継いでいく。これこそが、司馬さんのいう「**独創者を出す風土**」が生んだ近江の文化です。



デザイン・イラスト/中川悠

近江 商人が残した 意思

竹田愛海 武田早紀



ちょうじふ 丁子麩の辛子酢和え

近江商人が持ち歩きやすくするために作られたと言われる「丁子麩」は四角い形が特徴で、

近江の町並みがモチーフになっているとも言われています。

そんな丁子麩を白みそで作った特製の辛子酢みそで和え、きゅうりとかまぼこで彩りも豊かな一品に。

ふわふわした麩は、栄養が豊富であり商人たちの旅のお供になっていました。

質素な暮らしをしていた近江商人ですが、質素な暮らしながら地元へ学校をまると寄付するなど、

柔軟な中にもしっかりとした信念をもって経営を拡大してきた近江商人は、商人たちの工夫から生まれた弾力ある丁子麩と似ているものがあります。

滋賀県では、持続可能な開発目標 SDGs の特徴を生かしながら「未来へと幸せが続く」持続可能な滋賀社会を目指して積極的に取り組んでいます。琵琶湖の環境にやさしい石けんを使う石けん運動や、中世以降全国で活躍した近江商人の三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）の精神など、SDGs を取り入れる土壌が、すでに近江にはありました。近江には、自分のことだけでなく、環境や他人に対して、恩を忘れない相手を思いやるという意識が根付いています。三方よしの精神を生み出した近江商人の考えを継承することで、近江の人々の魅力に迫ります。

SDGs に対しては国連サミットで定められた近江企業だけでは担えない課題があります。

1 思いの共通点

司馬さんは東近江市の五個荘を訪れており、近江という地の土壌の深さに魅入っていました。五個荘は、近江八幡、日野、高島等と並び近江商人発祥の地とされています。これら近江商人は、地域によって細分化されており、活動期間や取り扱う商品、商圏は異なっていました。しかし、近江商人の理念を解いていくと、違うように見えた商人たちに共通点が見つかります。近江商人の家訓には利己的な考えをせず、社会の幸せを願う三方よしや、世の中に対して人知れず善行を積み徳徳などがあげられます。己に対しては出費せず勤勉に働く心構えは、しまつしてきばると言い、これは商人たちにとって共通の考えであり、尚且つ近江の人柄を表しているといえます。ほかにも 商売をするうえで人としての精神的な教え・心得が凝縮された商売十訓が存在し、相手の善になるよう考えて商売をするという意識を読み取ることが出来ます。

また、司馬さんが近江商人について「他国の商人とちがうところは、近江商人に遠隔地商業の感覚があったことである」と述べているように、商人たちは各地で商売をする行商が特徴の一つでした。司馬さんの著書『歴史を紀行する』では「国から国へと行商してあるいたのは近江人であり、そういうことが近江人だけの習慣になっていた」と語られています。そのおかげで全国における繋がりが生まれ、人との関わりを大切にしていたからこそ 相手を思いやるという共通意識が近江商人特有の人柄として芽ばえたと考えられます。



近江商人の象徴 重い天秤棒を担ぎ、全国へ行商に向かいました

2 未来に繋がる思い

近江商人たちの利益を顧みずに貢献する思想は、現代においても近江の人々に浸透しています。近江商人の思想を元にした企業や、商人自身が創始者である大手企業の社会的責任を示す CSR (Corporate Social Responsibility) の取組 などから、近江商人が大切にしていた教訓がうかがえます。2019 年、滋賀県は「SDGs 未来都市」に選定されており、「世界から選ばれる『三方よし・未来よし』の滋賀の実現」をテーマに掲げました。商売に関わらず近江商人の基本であった 相手を思いやる気持ち。これが近江の人々へ代々受け継がれた意思であり、未来へと続く近江の思いです。



五個荘の町並みは、舟板を再利用した黒と白壁が特徴的です



守徳屋 長や家の中に置いてありました

教えを「形」に

近江商人には多くの家訓・教訓がありますが、五個荘には商人たちの思想が具現化されたものが商人屋敷にありました。それが 守徳屋 です。ふっくらとしたお腹に、大きくくり抜かれた目が特徴の狸の焼き物です。空利になった日は、社会情勢を見通せる人に、太っ腹な精神を持ち、近江商人の家訓を身につけたタヌキ（他抜き）のごとく秀でた人になれるように、との願いが込められています。守徳屋は、家や蔵を守るように五個荘に点在し、商人の教えが、目に見える形として存在していました。

商いの工夫



江州柏原 伊吹山のふもと 亀屋 佐奈のきりぎりす

CMソング

芸者たちに三味線でお店の肌を披露させ「伊吹又」の名を全国に広めた松浦七兵衛という宣伝上手な近江商人がいました。CMソングのはじまりと言われていました。



うちわ広布

近江商人は、お世話になっている取引先のうちわを配っていました。お店をPRする文字を書き、広告物として使用していたのはじまりと言われています。

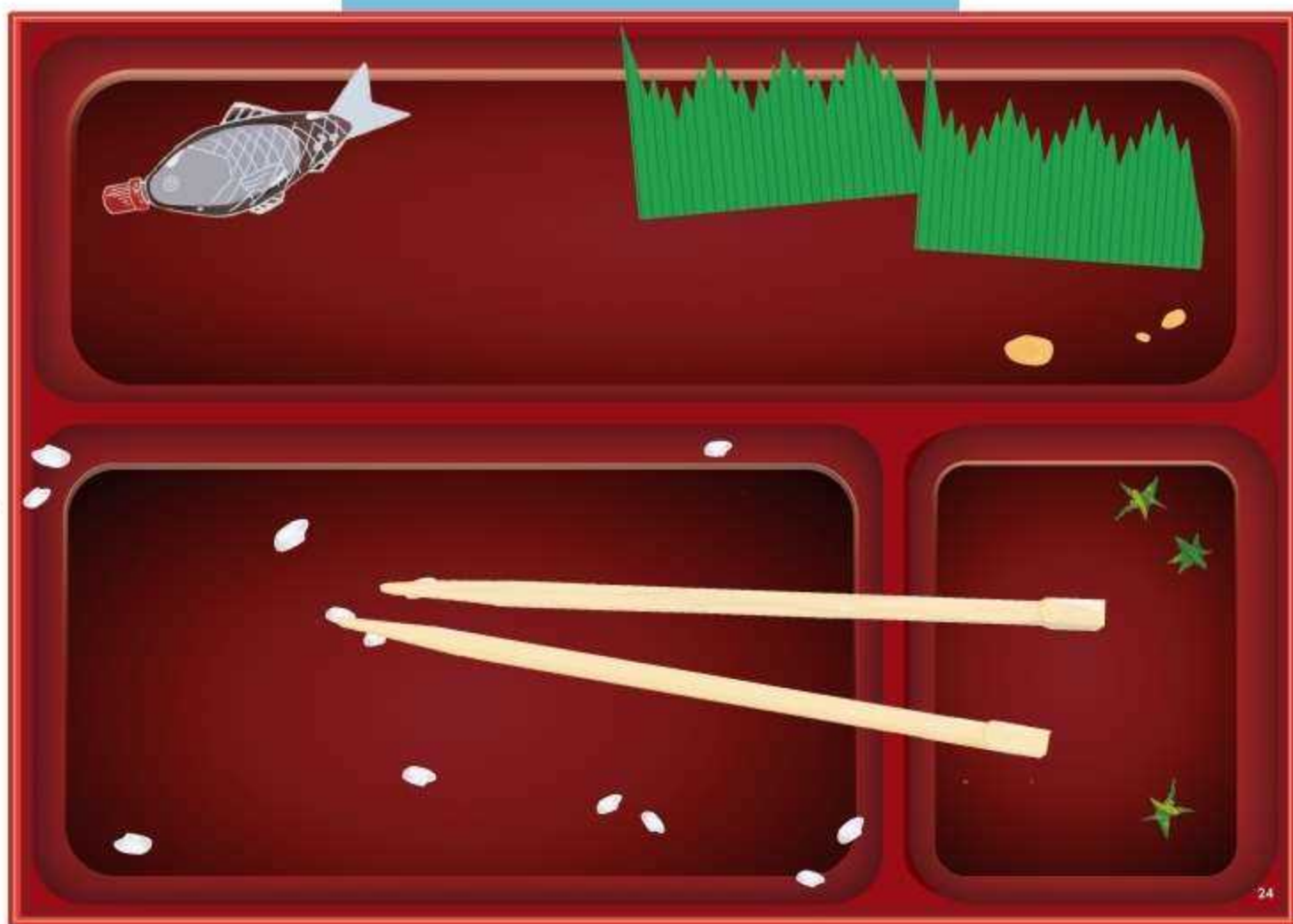
ごちそうさま!

近江路ができるまで

近江には、「近江路」で詰めきれなかった魅力が
まだまだたくさんあります。

その中から、私たち成安造形大学の学生は
どのようにして近江の魅力を集めてきたでしょうか。

その裏側を少しだけお見せします。



アイディアを求めて

ワークショップをしました

司馬さんが「近江散歩」で、はじめに訪れたのが、滋賀県と岐阜県の県境にある寝物語の里と柏原でした。私たちのフィールドワークも司馬さんにならい、寝物語の里から滋賀県に入るところからスタートしました。中山道六十番目の宿場町である柏原では、柏原自治会協力のもと、地元のみなさんと交流を深めながら、地図作りワークショップを実施し、柏原で起こった昔の出来事や、現在の様子についてお話を聞きながら、地図に付箋でコメントを書いてマッピングしていただきました。ワークショップは、学生の一つの質問に対して、10の答えを返してくれるなど、熱気に包まれ、地元の方同士でも知らなかった情報の交換や、昔ばなしを懐かしむなど、実りの多い時間になりました。「柏原のいいところを、いっぱい知ってほしい」という地元の方の思いに対して、私たちも、近江の魅力をもっと発信して、多くの人に届けたいと強く思いました。

ワークショップで作成した地図は、こちらのサイトからご覧いただけます。
URL: <http://ur0.work/ZNSN>



地域の方々のお話

柏原の見所などたくさんのお話を聞きました。

〈寝物語の昔話〉

静御前と江田原三は、帰郷経を辿っていったときに寝物語の里で出会ったんです。お互いの声を聴いて再会を喜んだ二人は、翌朝に夜が明けるまではなしてたらしいと言われているんです。

〈野瀬山城跡（長比岬）〉

浅井長政が野瀬山の中腹に城を築いたんですけど、入り口に右の灯籠が二つあるねん。それを正面から見たら右側「寛政12年」、左側「享和2年」って書き込まれておるんです。とても歴史がある場所なんですわ。

〈青龍寺徳馬殿〉

ここのお寺の庭園がきれいで、有名な「幽室の掛け軸」を見ることができるんですわ！地内に京極家の墓が集まってるので、国の史跡になっているんや。

〈織田信長と柏原〉

1570年に起こった「姉川の戦い」で織田信長と多くの武将が重要視した大事な地点なんです。旅人が疲れを癒すために酒屋と素走り屋がいっぱいある宿場町やったんです。信長が戦で銃が活躍するって知ってたから、町に火薬の原料ともなるもくさ屋が10軒もあったんですわ！

学生の感想

特に印象に残ったのは、柏原は関東と関西の文化の分かれ目だというお話です。味噌が白みそと赤みそ、餅が丸餅と切り餅、家に使う木材も違うということをお話してくださいました。岐阜と滋賀の県目だからこそ地元の文化に誇りを持っていて、地元に対する愛着を強く感じました。（深田祥子）

司馬さんの文献や石碑で歴史をたどり、さらにその土地で暮らす方々とお話ができただけで、生きた歴史を感じることができました。地域の方々との触れ合いをとおして、歴史ではなく人々の記憶を手繰っているような感覚になったことが新鮮でした。（武田早紀）

柏原の街並みとして旅館屋ももくさ屋の建物が名残を留めていることから、当時の人達が見たであろう景色を徳ぶことができました。また、雲や霞から家を守る紅殻の赤は自然と調和していて美しかったです。（森内春香）



食材探し

フィールドワークをしました

『街道をゆく 24 近江散歩』で登場した地域とその周辺を、2019年10月から2020年3月までの期間でフィールドワークしました。フィールドワークで印象的だったのは、石碑や歴史的な説明が書かれた看板の多さでした。松尾芭蕉の句が彫られた石碑があったかと思うと、万葉集に詠われた地があったり、古戦場の石碑があったかと思えば、古事記の逸話が残る神社があったり。近江は、歴史の表舞台にずっと立ち続けてきたのだと感じました。司馬さんが何度も何度も近江を訪れたのは、そんなところにも理由があったのではないのでしょうか。近江には、まだまだ魅力の素材があふれています。私たちの魅力探しの旅を少しだけご紹介します。



五個荘
金堂町



寝物語の里



柏原宿



彦根城



姉川
古戦場



国友
鉄砲鍛冶の里



安土城跡



近江八幡



西の湖



撮れたて 近江文化

SNSで発信中!

YouTube



はっけん! 近江文化

P28

まだまだ紹介しきれない近江の魅力を SNS で発信しています。学生たちの活動の様子や、冊子作りの裏側、冊子未公開の写真など盛りだくさんの内容です。また、近江の魅力をギュッと詰め込んだ動画を YouTube で配信しています。学生ならではの目線から近江の魅力を発信しています。



YouTube



近江の魅力を詰め込んだメイン動画と、五個荘近江商人展覧、国友歌碑ミュージアム、西の湖水郷めぐりで、地元の人にインタビューした動画を制作しました。4本の動画に近江の魅力が詰まっているのでぜひ、ご覧下さい。



見どころ

琵琶湖をはじめ、街道沿いの古い町並みや安土城の石積みなど、昔から変わらずあり続ける文化や歴史の魅力を、大学生の心情の変化と共に、映像で表現しました。

Facebook
omibunka.hhInstagram
@omibunka_hh

P29

Twitter
@omibunka_hh

私たちがつくりました

プロジェクトを終えて

『近江路』を制作した10名の学生が、近江の魅力を語ります。フィールドワークや、冊子・動画制作をおして、印象に残ったことなどを振り返ります。

P30

掛橋



司馬さんは『街道をゆく』で、当時の近江の景色だけでなく日本の風景自体を嘆いており、見た人が行きたくなくなるような風景を撮ることが出来るのか少し不安でした。しかし、現地へ向かう電車から見た景色も、安土城跡の頂上から見た景色も、思わずシャッターを切るほど自然豊かで美しいものでした。この冊子を手にとった皆さんには、写真だけではなく、現地に足を運んで見て欲しいと思いました。

竹田



私は近江商人について詳しく調べてきましたが、近江は近江商人だけの文化が特化していたのではなく、酒師さんや遊楽人たちの多種多様な文化が入り混じっていました。多くの人々が活発に活動していたから近江の地は魅力的に発展していったのだと感じました。

森内



『街道をゆく』に描かれた湖北・湖東地域はどこへ行っても水がある景色を見ることができました。町や野に水が流れる光景は自然と調和して、滋賀の魅力を超える上で欠かさないものになっていました。

私は滋賀県で生まれ育ちましたが、今回の活動で、近江の人の琵琶湖を守るという考えや、水を大切に使うという姿勢など、今までは当たり前だと思っていたことが実は魅力なんだと気づかされました。今後もこの滋賀県を昔の人に恥じないように守っていかねばと感じました。

中村



地

天

五ヶ荘へ訪れた際に、どっしりとした重厚感のある石積みや白壁、船板でできた壁に囲まれる屋敷が立ち並ぶ街並みと、商人屋敷内で聞いた近江商人の「しまつしてさばる」や「三方よし」といった思想が、過去から現在まで変わらず受け継がれていることに気づきました。歴史を重んじて未来へと繋ぐ近江の人々の魅力だと感じました。

フィールドワークでたくさんの近江の方にお話を聞きました。近江の文化は他の人や子供たちに伝えることで守られているのだと思いました。私たちもこの活動をおしてたくさん知ったことを発信して近江の文化を残して行きたいと思います。

窪田



P31

堺



この冊子の原点「近江散歩」は、歴史や人物など幅広い観点から近江の魅力について語られています。時には厳しく現代の近江における課題点にも触れており、近江の未来まで見据えた司馬さんの真剣な姿勢を感じ取ることができました。

中谷



近江にある数多くの他国の文化・歴史を大切に、後世に伝えていこうとする姿勢に司馬さんは惹かれていたのではないかと思います。また、実際にその文化・歴史が形を覚えて今も残っていることを魅力に感じました。

実際に街道を歩き、調査を進めていくと「司馬さんは、街道が通い、文化や情報の集積地であった近江に魅力を感じたのではないか」と思うようになりました。司馬さんの取り上げた他の街道も、機会があれば歩いてみたいです。

『街道をゆく』で司馬さんの水路を巡る章を読み、初めて西の湖の存在を知りました。そして、興味を引かれたのは西の湖に生えるヨシについて。辞書と地元の方で、ヨシの定義に違いがあることが面白いと感じ、フィールドワークを選びました。そのような気づきを与えてくれることが『街道をゆく』の魅力の一つなのだと感じました。

比嘉



武田



阪口



地

『近江路』に寄せて

司馬遼太郎氏は、戦後復興を成し遂げた日本が、アメリカ合衆国がリードする合理主義、物質主義社会に飲み込まれていく日本の存続を憂いながら平成元年（1990年）にこの世を去った。司馬氏は歴史小説を執筆する傍ら、日本人とは何なるものか、日本の本来の姿とは何と云うことを常に考え、後世に伝えるべき姿を感さずにはならないと誓いを解けた。

日本人は多様な自然地形や環境、気候風土の中で何事にもとられない柔軟な発想を醸成してきた。道楽人が持ち込んだ仏教と日本の八百万の神を融合させたことからその想像を感じることができると司馬氏は語っていた。「街道をゆく」シリーズは日本の各所に現れる日本人とその生活を描り起こし、未来に残さねばならない日本の歴史を描き出すことが目的であった。そのシリーズの出来場が『近江路』なのである。

『近江路』で描かれるあわわとした風景を口ずさむだけでも、私には詩がはじまっているほど、この国が好きである。京や大和がモダン舞地のようなコンクリートの風景にコチコチに固められつつあるいま、近江の国はなほ、雨の日は雨のふるまことであり、朝霧の降る日は川や湖までが霧霞のふるまことであるように、おいらの心はなほ、

この国を旅文を記すこと、司馬氏は近江の郷土が日本人の理想そのものであると言わねばかりであると感じる。学生たちは、このコンクリートを備前の時計がたどった近江路を歩いた。そしてまためられたこの冊子の中には、近江国人の誇りや自覚として、湧き水と琵琶湖と暮らす人々の姿勢、日本人の文化の残り香や学生たちの情熱や行動力など様々な学生たちの思いが凝らされている。これらはまさに司馬氏が若者たちに伝えたいこと、近江の国を愛する者の「かたち」に違いない。

この年、国連は大量生産・大量消費の生活至上主義から引き起された環境破壊等の社会問題の解決のため、1972年までに持続可能な社会を実現するための意識を高めるべきと、この国を目標として「SDGs」を掲げ、持続可能な社会を実現することを促す。「すべての人に健康と福祉を」「クリーンな自然エネルギーを」「水と森を大切に守り、持続可能な開発のために水・海洋・沿岸と生態系（海の生物資源）を元気に保ち、持続可能な生産消費形態を確保する」「水と森と海を大切に守り、持続可能な開発のために水・海洋・沿岸と生態系（海の生物資源）を元気に保ち、持続可能な生産消費形態を確保する」。

今回のコンクリートに参加した学生たちは司馬氏が大切に想った近江路の周辺を歩き、そこに持続可能な社会を実現するために何をすべきかについて考えた。『近江路』は持続可能な社会目標そのものなのである。

近江国土官町 田代 和彦 執筆

天

P32

地

天

P33

地

